

施設児の適応問題

——海上生活者の児童を中心として——

広島県立保育専門学校

菅 近 妙 子

西 元 道 子

瀬戸内海にはタタミ二畳敷にもたりない船の中で一家族が生活し、生活技術は一本釣程度の原始的な方法により漁場を求めて住所は不定、年に二回郷里に帰ってくるという状態である。それゆえに教育を受けずにごす人がほとんどで、昭和三十一年十二月に広島県のある地方においてなされた実態調査によると十八才以上の成人中六〇％が無学文盲であるという驚くべき実状だった。これは知的に劣るだけでなく、personalityの面においても劣ったところが多く、種々の変った特性がみられた。入寮当時は部屋の片すみ、押入れに入って遊ぶ、便所を知らない、上ばき下ばきの区別を知らぬなど日常の生活習慣が普通の家庭の児童と全く異っている。これら不幸な児童のために広島県にも三つの学寮がつくられ学習と生活の両面にわたっての教育に深い考慮が払われるようになったのであるが、幼児期に送った生活習慣が根強く、いろいろと困難な点が多い

ようである。

そこで児童たちが学寮に入って生活していくプロセスにおいて自己と環境をいかに調和させ、どのような適応状態を示しているかを知り、今後の指導及び対策の手がかりを得たいと思って本研究をおこなったのである。

海上生活者児童と比較対照とするグループ普通児、養護施設児を対照群として適応性診断テスト(1異常傾向 2神経質傾向 3自尊心 4退行的傾向 5自己統制 6社会的技術 7統率性 8家族関係 9学校関係 10近隣関係)をおこなった。

この特性別考察を小・中学校において全体的に考察してわかることは、普通児と海上生活者児童は大きな変化をみせないが、養護施設児は著しく低下している。

そこで両親の有無が問題となるがまず両親のもとで生活し通学している普通児にくらべれば、両親がありながら学寮で生活している海上生活者児童は大きなへだたりがある。しかし現実には彼らはどうしても親のもとで生活することが許されないため施設に入っていないが、良い適応にもっていくにはどうすれば良いかということが考慮されなければならない。

